

「今井研卒研究生・有志の会」

会 報 第 12 号
2008.9.30

	目 次	頁
1.	巻 頭 文 今井 哲二 先生	・・・ 2
2.	佐藤 秀吉 様 への 追 悼	
	1) 奥さまの 佐藤 進子 様より	
	2) 池田 博昌 様より	
	3) 高井 謙次 様より	
	4) 鈴木 威一 様より	
	5) 今井 哲二 様より	
3.	塚本 一義 さん、成書を出版 紹介 今井 哲二	・・・ 4
4.	「会報 第 11 号」にお寄せ戴いた 感想文	・・・ 11
	1) 鈴木 威一 様	
	2) 黒田 裕允 様	
5.	小野澤 賢三 様 よりの 寄稿	・・・ 12
	1) 印刷業界の功労者、小野澤 賢三 さんの紹介	
	2) 電算写植システムの開発 (その 1) 小野澤 賢三	
6.	第 六 回 懇 親 会 (2007.07.28) の 後 半 から	・・・ 20
	1) 島田 慶甫 様	
	2) 伊藤 恭弘 様	
	3) 小野 雅敏 様	
	4) 橋本 潔 様	
	5) 鈴木 威一 様	
	6) 斎藤 哲也 様	
	7) 安原 信彦 様	
	8) 帯谷 達郎 様	
	9) 坪井 孝光	
	10) その他	
	11) 手締め	
7.	編 集 後 記	・・・ 27

1. 巻頭文 記録に残すこと

今井 哲二

LSIさらには超LSIが大量に生産され、マイクロエレクトロニクス時代が到来し、その中心的役割をコンピュータが担うようになったとき(1980年代)、FA(ファクトリー・オートメーション)と並んでOA(オフィス・オートメーション)という言葉が流行語となった時代がある。その際、OAに絡んで“ペーパーレス”の時代がやってくる、とも言われた(しかし、その後そうした時代は来なかったようである)。

インターネットが現在のようにボーダーレスに利用される時代には、ハードコピーされる文書や情報が、全情報・文書量の何%に当たるのか、小生には見当もつかない。デジカメが急速に普及し、“携帯”が多機能化するなど、静止画のみならず動画も気楽に撮れ、CDやDVDに保存される時代になった。往時の“マイ・アルバム”などというものの比重も、一般家庭においてさえ急速に低下しつつあるように思われる。

こうした中で極く最近、小生が通研時代に数年間仕えた上司(甘粕小三郎氏:以下、A氏)の依頼で、その方の『人生回想録』なる冊子を作る御手伝いをした。文章部分と写真部分とがほぼ3:2で、写真の古いものは大正前期に遡り、最新のものは昨年撮ったものもある(全170頁:A4版)。個人的には、小学校あるいは大学の同級会関係のものもあるが、研究資料としては、戦時中・戦争直後に発表された学会誌論文や、その当時の当該分野の世界的な著名人と交わした貴重な資料なども含まれている。例えば、J. Appl. Phys. の査読委員から送られた“審査結果・アドバイス”などは、Signの跡がインクの青色を鮮明に遺し、その査読委員の著名度と共に今に甦ってくる思いがする。

比較的最近の資料としては、盛田昭夫氏との交流の跡を偲ぶ、盛田氏直筆の「恵存」と書した署名入りの珍しい盛田財団(正式名:鈴湊学術財団)に関わる資料などもあり、徳川初期以来約四百年に亘る庄屋としての盛田家の側面をも改めて知った次第である。

A氏の勤めた会社の『研究報告誌』に「巻頭言」として寄稿された、濱田成徳、西堀栄三郎、高木昇、緒方研二、鳩山道夫各氏など日本のエレクトロニクスを興し、育てた著名人の“日本のエレクトロニクス”に対する想いを深く嚙締りながら目を通すこともできた。

A氏は90歳代半ばになろうとする御高齢で、文脈を整えて写真やキャプションを付すことに少なからぬ苦勞をされていたので、御手伝いをした次第である。しかし、【こうした資料を正確に整理して、硬軟織り交ぜ“記録”に残すことは金銭に替え難い貴重な作業だ】と大変喜び高く評価して頂けたのは嬉しいことであった。

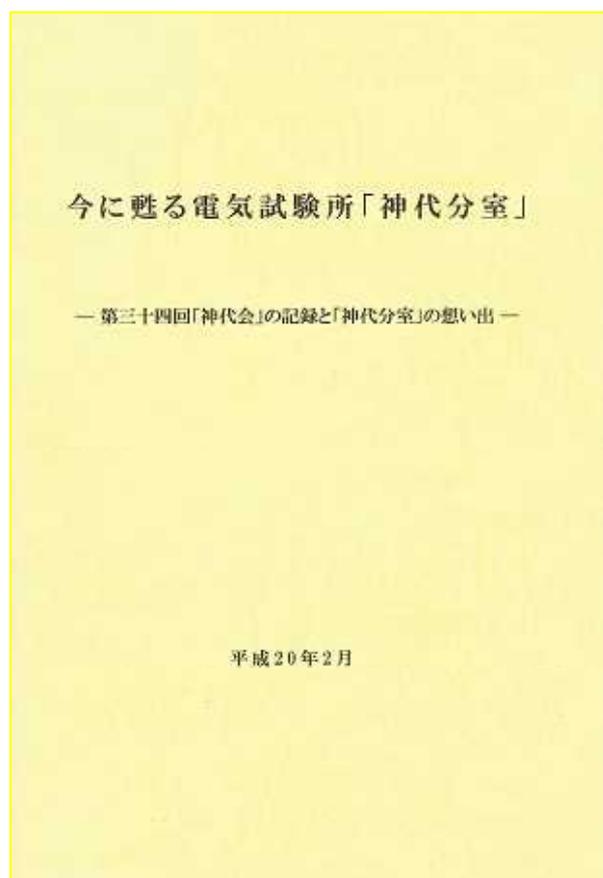
こうしたものは、パソコンに残しておいたり、CDに取り込んでおいても仕方がない類のものといえる。実際に手間隙をかけて編集をし、印刷・製本し、頁を捲って始めてその人の歩いた人生を回顧することができ、感銘を受けることができるものだ、と実感した。こうした“記録を残すこと”は、多様化する“記録の在り方”が顕在化してきた今、未曾有の革新的時代の到来へ向かって努力をし、そこへの過渡期に生きた我々「後期高齢者」にとっては特に意義深いものがあるのではなからうか。

なお、ついでながら小生自身も、A氏の回想録作成の直前に『今に甦る電気試験所「神代分室」』と題するA4:150頁の小冊子を記録として纏めた。平成13年発行の『日本のエレクトロニクスの源流 - 電気試験所神代分室の記録 -』に直接或いは間接的に関わるアレ・コレを収録してある。またここには、「神代会会員の二世」が総責任者となってNTTが進めているNGN(Next Generation Network)に関する講演も含まれている。

この小冊子作成に当たってもA氏より少なからぬ御援助を頂いている。この内容梗概も折を得てご紹介出来ればと思うが、ここでは、表紙のみをA氏の回想録と共に並べておく。

追記

上で述べた“記録に残すこと”とはちょっと異なったテリトリーに属すると思うが、“キチンとした機関・出版社から著書を出版すること”、これは、誰にでも出来ることではない。“一生の事業である”とも言える。今般本会の熱心な会員である塚本一義さんが、本邦初演とも言える極めてユニークな著書を発行された。このご紹介を別項で行ってある。



2. 佐藤 秀吉 様 へ の 追 悼

1) 奥さまの 佐藤進子 様 より

去る 2007 年 12 月 24 日に、卒研でお世話になった通研職員の佐藤秀吉様がお亡くなりになりました。お亡くなりになった佐藤秀吉様のご家族に対し、今井先生を始め卒研生の鈴木威一、高井謙次、後藤信男、小野雅敏、斎藤哲也、梅枝茂弘、鈴木高志、坪井孝光 各氏からの御霊前をお送りしたところ、奥様の佐藤進子様より、次のような返礼のお手紙と写真をお寄せいただきました。

厳しい寒さが続いておりましたが ようやく光の春を感じる頃となって参りました
今般 亡夫 秀吉へ 皆様からお寄せ下さった御厚志を有難く頂戴させていただきます



お名前を拝見して 昔 拙宅へお越し下さり
本当に楽しそうに談笑されておられた皆様の若い
日の情景がなつかしく 思い出されます
そんなとき 本当に楽しそうに幸せそうでした
あらためて生前の御厚誼に厚く御礼申しあげます
今井先生から御丁寧にお電話いただきましてあ
りがとうございました 心ならずも難病をかか
え長い闘病生活となりましてお役にたてず 申し
訳ない事でした

皆様に宜しくお伝え下さいませ 遅らばせなが
ら 御挨拶申し上げます

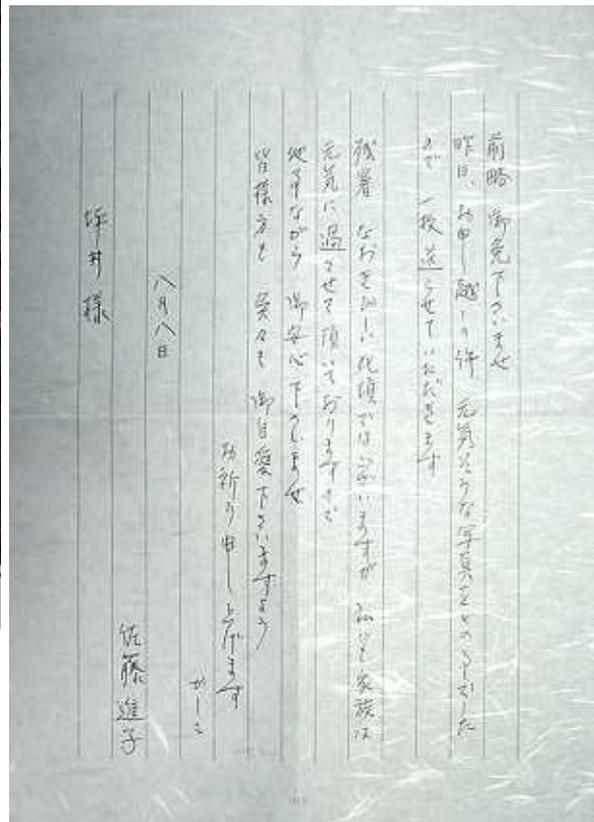
平成二十年二月二十一日

佐藤 進子

奥様からお手紙付きで、2008.8.9 に送られてきた 「在りし日の 佐藤 秀吉 様」



昭和 62 年頃(武蔵野電気通信研究所: 技術協力部
部長在職時、部長室にて)



下記に、お寄せ頂いた追悼文を掲載いたします。

2) 池田 博昌 様(同期入社)より 佐藤秀吉さんを偲んで(「日比谷同友会会報:2008.4、No.181」より転載)

謹んで佐藤秀吉さんの霊にお別れの言葉を申し上げます。

昨年12月25日に徳吉睦生さんから電話があり、佐藤さんが24日に急逝されたとのこと連絡が奥様からあったと伺いました。そして、28日のご葬儀には参列いたしました。かねてからご療養中とは伺っていましたが、こんなに早い訃報に接するとは思ってもおりませんでした。

佐藤さんは、昭和34年に新潟大学理学部物理学科を優秀な成績で卒業され、電電公社に入社されました。同期入社で、練馬区の独身寮と一緒に入居し、以来電気通信研究所(現在のNTT武蔵野R&Dセンター)で28年間共に研究実用化を推進してきた間柄です。独身寮時代は、仕事とは離れて、休日とか自由時間をともに過ごし、日帰りの散策、写真撮影などを共に過ごし、寮の部屋に話の合う仲間が集まっては種々の話題での放談を楽しんでおりました。佐藤さんは、特に仏像の写真に造詣が深く、寺巡りのお付き合いもしておりました。

研究所では、真面目で真摯な性格から、半導体の信頼性に関する専門家として、頭角を現してこられました。集積回路研究部高信頼部品研究室、技術協力部部品技術研究室長を経て、昭和五十八年には技術協力部長に就任されました。この頃になると、私はINSモデルシステムやデジタル交換方式、佐藤さんは部品・材料で共にNTTの中核となるシステムの実用化に互いに連携をとる機会が増えてきました。部長の時代は、互いに自宅が小平市にあった関係で、通勤の社用車が相乗りになったり、休日には一緒にゴルフを楽しむ関係も持てました。そして、昭和62年10月に研究所を勇退され、三洋電機株式会社に移籍されました。

三洋電機では、情報システム事業本部情報機器事業部にあつて、情報機器の開発戦略に携わっておられました。このころは、学会、シンポジウム、展示会などでお会いする機会が増えましたが、当時のご担務をお聞きしても「社外秘!」とあまりお教えいただけませんでした。その後も、技術戦略室、研究開発本部・上席部長と重責を重ねられて来られました。ご葬儀の際に拝見したアルバムには、たまたま私の大学の友人と一緒にアメリカにご出張された時の写真を拝見しましたので、その友人に三洋電機時代の仕事ぶり、ゴルフに伴うエピソードなどを聞くことも出来ました。

平成8年に退職されたとお話を伺ったのですが、59歳でのご退職で、ご事情を伺ったところ、ご病気で職務が厳しくなったとのことでした。その後も、徐々にご病気が進み、だんだん私共とお会いする機会が減ってきたので心配しておりました。三年程前には、同期の集まりに参加され、みんなは元気で良いねと漏らされたのが最後にお会いした機会となってしまいました。

親しい同期生に会えなくなってしまい、誠に寂しい限りです。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

[池田 博昌 氏の略歴]

昭和34年入社、D-10、D-70 電子交換機の研究実用化に従事。

昭和43年には世界初のデジタル衛星通信方式「SMAX」の交換方式の研究試作をおこない、

米国NASAの実衛星を使用した日米間の通信実験に成功。

昭和58年:臨時モデルシステム研究部長

昭和59年:基幹交換研究部長

昭和62年:交換システム研究所長

平成2年:取締役・LSI研究所長

平成6年:大阪大学工学部・教授(情報ネットワーク工学講座)

平成12年:東京情報大学・教授

平成19年3月:同大定年退職 同年12月、同大名誉教授

電子情報通信学会・名誉員、IEEE・フェロー、技術士・APECエンジニア

3) 高井 謙次 様 (電気通信研究所 元今井研卒業研究生) より 佐藤秀吉さんへの追悼

佐藤さんが昨年12月24日にお亡くなりになったとの訃報をいただいたのは今年の1月下旬のことでした。長い間持病と闘われ、最近はかなり安定してきたと伺っていたので大変ショックでした。肺炎とご持病が原因で嚥下が困難になり、急速に体力を落とされたのが原因とのことでした。私の父も20年ほど前に同じように嚥下機能不全が原因でなくなったので、当時の父の闘病生活を思い出し、佐藤さんの無念さと、奥様のご苦労の大きさが思いやられました。

佐藤さんは、私が大学4年の時に卒業論文委託研究生として武蔵野通研の今井研究室へ派遣された際の担当官で、1年間いろいろご指導いただきました。当時の佐藤さんは確か30歳前後の前途有望な学卒の主任研究員で、半導体などの物理的知識だけでなく、英語をはじめとする語学に大変造詣が深く、まだ大学生だった私は、さすが通研にはこのようなすごい方がおられるのだなあと感心しておりました。また、勤務時間後にはテニスをやられたり、時々私達研究生を相手にキャッチボールをしたりして、運動にも気を使われていましたので、こんなに早くお亡くなりになるとは想像もできませんでした。

佐藤さんは、私たちがお世話になっている間にご結婚され、担当していただいていた仲間と一緒に、渋谷駅に程近い新居で夕食をご馳走になりました。その時の奥様の手料理が大変美味しかったことを、今でも鮮明に覚えています。私の記憶では、佐藤さんは人前では余り口に出して直接的な表現をされず、暗黙の行動や、心使いで人を思いやる方だったと思いますが、きっとこれまで奥様と深い所で、太い絆でつながれて充実した人生を全うされたことと存じます。

伴侶を失われた奥様のご心痛はまだ癒えておられないと思いますが、改めて佐藤さんのご冥福をお祈り申し上げます。

平成20年7月22日

高井謙次

4) 鈴木 威一 様 (電気通信研究所 元今井研卒業研究生) より 佐藤秀吉さんの思い出

“こんな凄い人が日本には居るんだ”と言うことを学生時代に私に身をもって教えてくれたのが、当時私を直接指導して下さっていた佐藤秀吉さんでした。

日本語で書かれた菊池誠博士の文献を理解するのに四苦八苦していた私にとって、卒研実施先・通研の皆さんの専門の技術に関するレベルの高さは、とてもワクワクするような内容で期待通りでした。

その上、輪講の時には、英語の文献は勿論のこと、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語の文献等に目を通してコピーと共に概要を説明する佐藤さんの姿には本当に驚きました。さらに中国語や、スペイン語なども勉強しておられました。其れまでの大学生活で思っていた研究者のレベル、それとは全く違う形で世界が直ぐ近くに有りました。

そして自分は、語学を語学の点を取る為にしか勉強をしてこなかった事を思い知ったのです。

佐藤さんは、“完璧にその言語を理解出来る訳でなくても、諦めないで、言語体系や単語などを勉強することで、必要十分な技術文献の読解力が養える”という研究者としての実学的な理解の仕方の重要性も教えて下さいました。しかも其の事は世界的レベルで研究する者にとっては当たり前の事ととらえておられる様でした。この考え方は、その後の人生でもとても役立ちました。

難しい幾つもの、論文を解説する時も、とても自然で、態度も全く偉そうでないのです、とても感心しました。一方夕方6時になると必ずTVのスイッチをONにして、“ひょっこりひょうたん島”を見ながら声を上げて笑うのです。特にお気に入り、**“ドンガバチョ役”**でした。私は子供番組ですので其れまであまり見たことも無かったのですが、佐藤さんと一緒に**“ひょっこりひょうたん島”**を聞くのが(実験している振りをして耳はTVの音を聞いている)日課になりました。佐藤さんの笑いが又実に良いのです、身体全体を使って、明るくて本当に嬉しそうに笑うのです。私は研究者としての厳しい佐藤さんと、子供番組に喜ぶ人間的な佐藤さんのギャップをととても好ましく感じていたことを、今でも昨日のように覚えております。

当時は学生で分らなかったのですが、社会に出て仕事をするようになって、佐藤さんが定時後に僅かな休み時間を使って効率的な気分転換を図って居た事に気づきました。

そう考えてみると、昼休みもキャッチボールをしたり、何か身体を動かして居られました。

集中した仕事と息抜きは、車の両輪でしょう。

卒業研究生としては、出来の悪い生徒であり随分ご迷惑をお掛けしましたが、いやな顔をせず指導して下さいました。また心配りのある、人を褒めることも上手な方で、少しでもユニークなことをやると、時々褒めてくれるので、其れも励みになりました。

佐藤さんは何時も他人に対する目線が優しく、卒業してからも佐藤さんと会うときは何か楽しい気持ちがありました。高井氏とご自宅にも伺い奥さまの手料理も戴きました。

人生の後半でご苦労されている時も、私の中の佐藤さんは昔と変わらない佐藤さんでした。

多くのことを学生時代に私に教えて下さり、私が人生の方向を考えると何度か直面した、“理想的な一流研究者は如何有るべきか”を考えた時に、沖の時代、I Rの時代、Philipsの時代を通じて、必ず頭に浮かべて自分の判断の基準にさせていただいたのが、佐藤さんと今井先生でした。

年齢的には我々の兄貴分であるそんな佐藤さんがこんなにも早くご逝去されるとは、誠に、誠に残念です。今は天国であの楽しい声で笑って居られることと思います。

有難うございました、そして心よりのご冥福をお祈りいたします。

現 株式会社エグゼクティブ・コンサルティング社長 一期一会代表世話人 鈴木 威一

5) 佐藤秀吉さんを偲んで

今井 哲二

昭和 30 年代、通研におけるトランジスタの研究は、外部のエレクトロニクス関連メーカに比して、率直に言って著しく遅れていた。電話回線の急速な需要増に対応すべく、通信方式の高周波化・高速化は焦眉の急であり、それに応える超高周波・超高速部品への期待は絶大なものがあつた。

使命を終えた電子管、それも電子管の脇役とも言える電子管部品の研究を担っていた我々の数名のグループは、昭和 30 年代半ばを過ぎても、他の多くに例をみるように雨散霧消をすることもなく、実に自然なかたちでグループ全体が、“エサキダイオードの研究”へと移行することになった。

そんな時に、我々のグループに新規学卒として所内研修を終えて正式配属されたのが、佐藤秀吉さんであった（昭和 37 年度、入社：昭和 34 年度）。彼は、まさに通研においてエサキダイオード研究強化のために投入された人材であった。そして彼は、その期待に応え、高度な半導体理論に補強された実用化研究の数々を遂行してくれた。当時、我々のグループでは、外部の私立大学（東京理科大・武蔵工大・日大）より卒研究生を受け入れ、その指導にも当たっていた。秀吉さんより直接この卒研指導を受けた学生は、延べ 10 人近くになるが、彼等は未だにその受けた学問的・人間的影響力の大きさを深い感謝の念と共に脳裏に刻んでいる。

昭和 42 年、私が半導体部品研究室長就任時に、「担当部長」は“前室長との間で秀吉さんの「情報特許部」への移動が決まっていた”ことを私に告げた。新任室長としては、部長命は絶対的なものであつたろうが、私は文字通り懸命にこれに反対した。秀吉さんの学問的・研究的能力の前途は、“情特部移籍”により確実に奪われる、と考えた。それまでの具体的例は如実にそれを示していたからである。そして彼の落胆振りが目に見えていたからでもある。秀吉さんに学位を得るチャンスを与え得なかったことを、後に大いに悔いたが、私の室長就任時に、すでに決まっていた「情特部」行きを撤回し、「技術協力部」そして「研究部」へ移るよう誠意を尽くして部長を納得させたことは、せめてもの罪滅ぼしと思っている。

私のグループで「複雑な特性のエサキダイオード」さらに「GaAs デバイス」の信頼性の研究を始め、それが彼の通研での研究のバックボーンになり、さらに、その後の研究実績に繋がる道を拓いたものと確信している。ここに、秀吉さんと私が連名で纏めた論文の一覧を挙げておく。いずれも、当時はインパクトの大きい優れた研究成果であった。

君はあまりにも早く旅立った。さぞ無念であったことと思う。通研での本格的な勤務の最初の時期に、私の許でよく励み、そして尽力をして戴いた。本当に有難う。み霊の安らかならんことを切に祈る。

研究実用化報告および学会誌発表論文のリスト (H.Sato, T.Imai et al)

論文名	発表者	巻号 年 頁
ゲルマニウムエサキダイオード特性の温度変化	佐藤秀吉 今井哲二	第 14 巻第 5 巻 (1965) pp.775 - 788
ゲルマニウムエサキダイオード特性の経時変化	今井哲二 佐藤秀吉 宮嶋多喜男	第 14 巻第 9 巻 (1965) pp.1973 - 1994
ゲルマニウム p n 接合の一軸性応力効果	今井哲二 内田正夫 佐藤秀吉	第 15 巻第 5 巻 (1966) pp.925 - 955
GaAs エサキダイオード ECL - 1243	内田正夫 佐藤秀吉 今井哲二	第 18 巻第 7 巻 (1969) pp.1759 - 1745
GaAs 接合の信頼性	佐藤秀吉 今井哲二	第 18 巻第 7 巻 (1969) pp.1747 - 1761
以上、NTT 研究実用化報告発表論文 以下、学会誌発表論文		
Deterioration of Ge Esaki-Diodes	T.Imai and H.Sato,et al	Jap.J.Appl.Phys.,vol.3 pp.661 - 662 (1964)
ゲルマニウムエサキダイオードの経時変化	今井哲二 佐藤秀吉 宮嶋多喜男	電気通信学会誌 第 47 巻 pp.902 - 910 (1964)
Effect of Uniaxial Stress on Germanium p n Junctions	T.Imai and H.Sato,et al	Jap.J.Appl.Phys.,vol.4 pp.102 - 113 (1965)
On the Effects of Cu on As Doped Germanium Tunnel Junctions	H.Sato and T.Imai	Jap.J.Appl.Phys.,vol.5 p. 1117 (1966)
Degradation of Ge-doped and Zn-doped GaAs Tunnel Diodes	H.Sato and T.Imai,et al	Jap.J.Appl.Phys.,vol.7 pp.875 - 880 (1968)

3. 塚本一義さん、成書を出版

紹介 今井 哲二

- 香川大学での「文・理 融合起業」体験がユニークな道しるべに -

塚本さんが、香川大学教授として在籍中に立ち上げられたベンチャー企業については、「本会報」において何度かご紹介をし、また御本人よりもご寄稿頂いた。「文・理 融合」というユニークな組織を備えたこの大学発ベンチャー企業を興し、育てた塚本さん（現・香川大学特任教授）が、この度『大学発ベンチャー 成功へのシナリオ』と題し、その貴重な体験、そして起業への理念等々を立派な著書として纏められた（和田氏との共著）。

本年四月中旬、この著書を御恵送頂いた折の塚本さんへの御礼文をここに載せ、取り急ぎ塚本さんご労作の大著について御紹介したい。何れ御本人からの本書に関する御寄稿を得たい、と切望する。

塚本 一義 様

前略失礼致します。

昨日、貴重な御著を拝受いたしました。

恐らくこの分野の類書が少ない現在、豊富な体験に基づいた御著は誠に貴重なものであり、本書に接し深い感銘を覚えました。

“本を書く”ということは本当に心労の多い
“事業”です。

“大学”が独立行政法人になり、体質は全く変わったはずでしょうが、察するに産業界とは隔離した教官がまだまだ多い中、塚本さんは早い時期からベンチャー企業を興され大きな注目を浴びてこられました。

興されました企業は『内閣広報誌』の表紙にも取り上げられましたように、多数候補の中でも優れた希少価値をもつ大学発ベンチャー-ビジネス、と評価されております。大学として取り上げるビジネス内容・着眼点が素晴らしいだけでなく、実産業界にも直結する組織を既に備えていること、これも、他の



追隨を許さない点ではないかと思っております

宗教に根ざした信念・努力・実行力には衷心より敬意を表しております。少しでもサポートしたいと思いつつも、ついにエンジェルになりえなかった力不足と不明とを思い、お詫びするばかりです。

にも拘わらず、御著では二箇所にわたり小生を引用頂き恐縮至極に存じております。誠に至らぬ師（先輩）を評価くださいましたことに厚く御礼申し上げます。

未だ拾い読みの段階ではありますが、個々人の集合体からなる社会での活動においては、誰か尊敬すべき先人に学び、それらの方々より何がしかの指針を得て、自分自身の独創性に結び付けていくことになるのではないのでしょうか。私はそうした点では、阪大工学部長・大阪電通大学長の菅田英治先生や阪大・東大教授であられた川村肇先生より多くの刺激を受け、教えられるところが大でした。こうした方々に巡り合えた幸運に感謝しています。

ご恵送の御著、座右においてさらに熟読させていただく所存です。

誠に有難うございました。立ち上げられました企業の前途の発展を心より祈念いたしております。取り急ぎ一筆お礼とさせていただきます。

またお目にかかれる日を。

草々

平成 20 年 4 月 15 日

今井 哲二

追伸

- ・ご恵送の御著で、大原省爾君に触れてありました。かつては、彼とも近い仕事をしたこと、三洋に移ってから彼から聞いたことなどを思い出しました。
- ・神戸工業から移り三洋で半導体の室長をやられた方、お名前は出ておりませんでした、私も思い出せずに

おります。メーカーも含め半導体で仕事をされた方は大概覚えているのですが。

・同送する冊子、最近纏めた写真集のようなものです。御通覧願えれば幸甚です。

・『応電分科会 60 周年記念号』、顧みますと、日本の半導体発展期に活躍された研究者の方々の殆どすべての方と多かれ少なかれ交流があった幸運を思い出しています。

4. 「会報 第 11 号」にお寄せ戴いた感想文

1) 鈴木 威一 様より

今回は、年 1 回の発行が決まって、初めての会報発行であった。

今回も坪井さん、今井先生の御尽力による所が大きい。幾らかでも坪井さんの負担が軽減され、結果として、この会報発行が末永く続くことを祈り、ご依頼のあった会報の感想を簡単に述べてみたい。

1. 巻頭言

今井先生の巻頭言が今回は有名人（福島党首）との 2 ショット写真 2 枚で始まっており、この写真がとられた経緯も、何と今回の懇親会の帰りに電車内で遇ったので、撮ったというので、これまた吃驚！ 偶然電車で有名人に出会うことはまああるが、そこで二人で写真を撮ると言うことの出来る人はまず無い。今井先生の記者精神に脱帽です。

何か思わず微笑んでしまうような出来事で、楽しく読ませて戴きました。

2. 懇親会

懇親会の様子が、坪井さんによって丁寧に文章化されており、今回懇親会に参加できなかった方にも、会の様子を知っていただけるのに十分な物になっていると思います。

とても暖かい雰囲気で行った会の様子を思い出しながら読ませて戴きました。

平賀様、岡本様というゲストを迎えての初めての懇親会でしたが、平賀様の健康維持のコツ、多彩なご趣味のお話、岡本様のご自身の近況と最近の学生気質の話はどちらもとても肩のこらない砕けたもので、今後の参考にさせていただくとともに、楽しく聞かせていただきました。

倉本先輩が乾杯の時に述べられているように、今井先生、平賀様、岡本様の皆さん方は我々卒研究生よりかなり年上なのですが、本当にお元気で、色々な事に活動的であり、私も未だ頑張らねばと思った次第です。

近況報告と 10 号記念号の感想については、小生の下手な文章が何度も掲載されており、恥ずかしい限りです、申し述べることは特にありません。

今回は装丁も少し簡素化し、ホッチキスとファスナーで綴じた物になっていましたが、予算が余り無いなら、これでも良いと思われます。印刷もとてもきれいです。

細かい点ですが集合写真と、編集後記はページを入れ替えたほうが良かったかなと思いました。

立派な会報を作っていただき誠に有難う御座いました。

今井先生、坪井さんに感謝いたします。

鈴木 威一

2) 黒田 裕允 様より

更にメモリー容量の大きい PC を導入された坪井さんの熱意によって編集された 11 号は写真と絵がほどよく挿入されていて楽しく拝読させていただきました。大変読みやすく、編集にあたっては相当の工夫とご努力のあとが伺えます。ありがとうございました。

10 号、11 号に掲載された平賀様の経歴と近況の記事を読ませていただき、私自身かくありなんと大いに刺激されました。八十八歳の米寿を迎えられながら、財団でのお仕事、毎日四キロの走破、ゴルフコンペへの参加、陶芸、絵画などと多方面にわたる現在のご活躍が健康を支えているに違いありません。平賀様が描かれた絵画、“家路” は逆光をあびて家路をいそぐ親子の姿が見事に描写され、思わず幼き頃の懐かしい日本を思い出し胸がいっぱいになりました。

5. 小野澤 賢三 様 よりの 寄稿

1) 印刷業界の功労者、小野澤 賢三 さんの紹介

今回「本会報」に小野澤賢三さんより“電算写植システムの開発”なる原稿をお寄せ頂き、この分野で小野澤さんの果たされた業績の大きさに改めて畏敬の念を深くした。

印刷分野のメーカーとしては、大日本印刷と凸版印刷くらいしか私は知らなかったが、この分野の老舗として後の「(株)写研」があり、小野澤さんはここで、この業界にも浸透し始めた「写植」のコンピューターシステム化とその開発・実用化に、その最初から携わられた。

(株)写研ご在職中はこうした分野の責任者として「システム技術部長」を勤められると共に、“JIS”規格の原案作成委員会幹事などを多年に亘って務められるなど、この業界で果たされた業績は顕著なものがあつた。「写研」後は、社団法人「日本印刷技術協会(JAGAT)」に移られて「研究調査部長」、「客員研究員」として業界を指導された。

JAGATが主催するイベントPAGE2007のコンファレンスでの一文をここに転載し、小野澤さんのご活躍の一端をご紹介したいと思います。

なお、2008年2月6日(水)には、2007年に続き”JAGAT トークショー「コンピュータ組版の軌跡」”が、小野澤さん等同じメンバーを講師に迎えて開催されている。

また、小野澤さんには「我々の会の会報」をホームページとして掲載する労をとって頂いていることについても、改めて心からなる感謝の意を表する次第です。(今井 哲二)



小野澤 賢三さん